16. 医療従事者の針刺し事故調査

○大塚ゆうり、吉田美生、下山桂子、吉原典子、

豊崎弘次 (久留米大学健康・スポーツ科学センター)

(目的) 針刺し事故の予防対策を考え健康障害の軽減に

役立てる目的で事故の現状調査をした。【方法】K大学

病院 (病床数1,263床) に勤務する医療従事者を対象に

針刺し事故に関する無記名自記式アンケート調査を実

施した。【結果】回答者数1,157名、過去5年以内に針

刺し事故の経験があったのは455名 (39.3%) であった。

事故原因は注射針 (261件: 57.4%) が最も多く、次いで

採血針 (80件: 17.6%) であった。背景となる因子

は「うっかり」 (217件: 47.7%) 「忙しかった」 (207

件: 45.5%) が多かった。事故後の対処は、洗浄・消

毒 (86.6%)、報告書提出、感染症のチェック、外来受

診などを行っているが、放置した者 (26%) もあった。

事故後感染の確認や治療のために外来受診をしたのは

212名 (46.6%) であった。【考察】危険性は十分に認

識されながらも事故は少なからず発生している。針の取

り扱いと事故発生後の対処法の具体的な指導の徹底が

必要である。

17. 事業所内聴力検査における防音ボックスの使用効果

○有吉美智, 八松康典, 森田哲也

(1) 日本音楽新聞社, (2) (財) 福岡労働衛生研究所)

聴音職場の聴力検査で、周囲の音に配慮のない検査の

妥当性を疑問視する意見があった。そこで健診会場で防

音ボックスをカーペット (床の吸音材として併用) 

を使用し聴力検査結果を比較した。方法: 半年毎の健康

診断で順に、①ボックス未使用、②ボックス使用、③

②＋カーペット使用、④③＋窓使用の条件で1,000および

4,000 Hzの聴力関値を測定した。結果: 1,000 Hzは右

左、それぞれ①167 (dB以下略), 171, ②109, 112,

③104, 96, ④106, 98とボックスで有意に良好な聴

力結果を得た (n=57, P<0.001, paired t-test) が、カ

ーペットなどを加えても変化はなかった。4,000 Hzは①

20.6, 18.2, ②21.4, 18.2, ③19.1, 17.0, ④18.0, 15.8

とボックスのみで差はなく、カーペット・窓を加え良好

な聴力結果が得られた (P<0.05)。結語: 防音ボックス

の使用により、会話域の聴力検査結果は良好になるが

高音域聴力をより正確に評価するには不十分で、床への

配慮まで行うことが必要となると考えられる。

18. 煙が漏れず効果の高い空間分煙の条件に関する検討

とその応用について

○大和浩, 山村香織, 大神明, 大観貴子, 

森田泰夫, 保利一, 田中勇武

(産業医科大学産業生態科学研究所, 産業保健学部)

(目的) 職場に効果の高い空間分煙を導入し、非喫煙者

の受動喫煙を防止することは遠隔職場の形成促進という

観点から重要である。禁煙区域に煙が漏れず、かつ、喫

煙場所においても良好な気環境を確保するための条件につ

いて検討した。【方法】喫煙場所からの煙の漏出の確認

は、喫煙場所と非喫煙場所およびその境界部分に設置し

たレーザー粉じん計による計数的粉じん濃度の測定お

びスモークテスターを用いた目視により行ったこと。

【結果】1) 喫煙コーナーと喫煙室の比較では、喫煙室

の方が煙の漏れは少なかった。2) 有害ガスが除去できず、

粉じん除去についても不足である空気清浄機よりも、

排気装置を用いた方が効果は高かった。3) 排気装置に

よる対策で喫煙場所から煙が漏れなかったためには、喫煙

室のドアなどの開放面において0.2 m/s以上の風速を発

生させることが必要であった。4) 喫煙場所内の粉じん

濃度を0.15 mg/m³以下に保つためには、平均的な喫

煙者一人につき13 m³/分以上の排気風量が必要であっ

た。以上の点に配慮することで、空気清浄機の半額程度

の予算で効果の高い空間分煙の導入が可能であることが

わかった。

19. 保健指導の方法、対象者の選択についての検討

○木本 登子, 松尾 茂子, 井手 陽子, 

白木田記, 藤本宏一

(1) 九州産業衛生協会福岡診療所, 2) 久留米診療所)

(目的) 健康診断時に保健指導を心する場合、その対象者

を選択する指標として、体脂肪率を用いている。体脂肪

率が基準値の範囲に入るのは保健指導の対象とはされて

いないが、その中で生活習慣病に関する保健指導を実施す

べき受診者である可能性について検討を行った。

【対象】健康診断当日に体脂肪率を指標として保健指導

を実施している某健康保険組合巡回生徒健診について、

平成9年から平成12年に連続して受診した347名を体

脂肪率の増加群、変数群、減少群に分け、健康診断検査

項目の変化について検討を行った。

【結果】体脂肪率の変数群については、総コレステロ